

『B29』が千葉市上空を襲った。昭和20年7月7日の未明のことである。

空襲警報下であった。電灯（球）を風呂敷で覆っていたので周囲は暗闇同然であった。警報は鳴り響き、爆撃機は低空飛行で次々と飛来。爆音けたたましく耳をつんざくばかりであった。低空で、千葉市上空を襲って来たのである。編隊を組んでの爆撃体制であった。

ザー・ゴー・バリッという大音響と共に焼夷弾が次々と投下された。空中で分解された小弾（角柱数十種位の鋼鉄製）が土中につきささり、生ゴム状の火炎が次々と飛び散って行った。まず、荒木山周辺（現弁天町地域）に火の手が上がった。焼夷弾投下によって火勢は増し、真昼同然の明るさになってしまった。その明るさをたよりに、焼夷弾は市内あちこちに投下され、その範囲は拡大の一途を辿った。火の手が、飛来の目印になっていたことは事実であったろう。強風が起こり、火は、次々と広がって行くばかりであった。

バリバリパチパチと燃える音が近づき遂に拙宅（栄町〇〇番地・6部屋廊下の木造家屋）にも火は移り始めた。50坪の敷地であったために、近隣の家々は近かった。小さい庭先の防空壕に家財の一部を投げ込んでみたものの何の役にも立たなかった。家のあちこちに火はまわり始めた。消火の施設は無く手の施しようもなかった。

吾が家の燃え落ちるのを見ながらの避難が始まった。夜中過ぎであったろうか。父は小さい包みを持ち、足の不自由な叔母の手を引き、私は、洗面器1ケを持ち、ゲートル、地下足袋ばき（当時の勤労働員姿～「国鉄管理局所属」）防空頭巾スタイルの逃避行。

火の海の中を逃げまどう人々の群れ、大ヤケドの人、泣き叫ぶ群衆――

空は真赤に染まっていった。強制疎開によって道路周辺の家はすでにこわされていた。道巾は広くなっていたので逃げやすかった。火の粉をはらいのけながら必死になって走った。家族3人が共に爆死してしまうおそれを予感したために、バラバラに逃げることにした。一人でも生きて郷里にたどりつかねばならないと考えたからだ。死の行軍そのものであった。

父と叔母は旧千葉駅の地下道に避難した。私一人院内田んぼ（旧要町方面に広がる広大な田んぼ・万葉軒のそばにきれいな小川が流れていた）方面へ向った。旧要町坂上（秋山商店横）は、群がる人々でごったがえしていた。高台が避難場所となっていた。

妊婦の方々がショックによって次々と出産。オギャアオギャアと赤ちゃんの声、群衆のどよめきが起こった。

「産婆さんの経験のある方いませんか、赤ちゃんが生まれてしまいました。助けて下さい」

兵隊さん（軍人）の大声がとぶ。死線をさまよう叫び声。右往左往の人々の群れが増していった。

火の粉は舞い上がり大火災となってしまった。昼間のように明るくなり、あたり一面修羅場と化した。

坂をかけ下り院内田んぼへ入った。畦を渡っているうちに、スベリ落ちて水田の中へつかってしまった。燃えるものは何一つなかった。ザー バーン ゴウーと、あちこちに焼夷弾は落下。ピチャンバチャンが続いた。弾のすき間をぬって全力で逃げた。洗面器で水をかぶりかぶりの避難行であった。

フツと吾にかえる、腕時計が1時15分。止まっていた。都賀駅寄りの線路上に、ぼうぜんと身を寄せていた。燃え広がる千葉市一帯を、口びるをかみ眺めていた。

夜が明け始めた頃、人々は、それぞれ吾が家（焼け跡）の方へと歩を進めた。私も大ヤケドの人々やケガをした人々の間をぬって、家の焼け跡を探そうとふるい立った。

家族バラバラになった場所（旧千葉駅前）で偶然に疲れ果てた父と叔母に会えた。思わず腕をかかえ合った。死線をさまようこと8時間余。一命をとりとめたのであった。

灰墟と化した焼け跡で、あてもなく、ぼうぜんと一昼夜を過ごした。見渡す限り、焼け野原の煙。旧千葉銀行の建て物だけがポツンと建っていた。近所の方々は、焼け跡にはおらなかった。異様なにおいがただよい、黒々とした人々が出歩いていた。

6月10日の爆弾投下によって、松谷外科（栄町志方病院近く）に入院中の女子師範学校の生徒達は、2度目の戦災に合った。付き添いの方々に、「あなた達は逃げて下さい。私達をおぶっては逃げられません、早く早く逃げて下さい。」と言いつつ焼死されたと聞く。病院前の路上で手を合わせる人々に出会った。

千葉神社境内にたくさんの焼夷弾の筒が土に突きささっていた。直撃によって多くの犠牲者が出たという。恐ろしかった。市内あちこちに焼夷弾筒はころがっていた。その数無数。

千葉駅に降り立つと、44年前の夜の出来事が思い出されてくる。洗面器1ケに身を托し逃げまどう一人の青年の姿が――。